

令和4年度
「患者と家族のがん研究基金」
先端がん医療研究助成 実績報告
Cancer Research Funds for Patients and Family

プログラム
抄録集

NPO 法人 医療・福祉ネットワーク千葉

令和4年度先端がん医療研究助成実績発表会は、誌上発表会に変更させていただきました。

1、『肝胆膵がん手術の成績向上のための仮想現実技術の活用』

東京歯科大学市川総合病院 外科 瀧川 穰

肝胆膵外科手術は高度な解剖理解の上に成立する。本研究では仮想現実技術(VR)を肝胆膵手術へ応用し有用性を検討した。多発肝転移症例に対する VR 術前シミュレーションでは、仮想空間上の臓器で手術を施行し局所解剖の理解を深めることが可能で、実手術においてはシミュレーション通りの切除が可能であった。倫理審査、契約上の問題で症例検討が限定されたが、その有用性の一端に触れ、症例の積み重ねが必要と考えられた。

2、『オルガノイド実験系を用いた頭頸部扁平上皮癌における免疫チェックポイント阻害薬に対する治療抵抗性機序の解明』

千葉大学大学院医学研究院 耳鼻咽喉科・頭頸部腫瘍学 花澤 豊行

頭頸部扁平上皮癌は未だ予後不良であり、遠隔転移に対しての有効性が期待された免疫チェックポイント阻害薬も奏功率は 20%に満たない状態にある。腫瘍微小環境を解明することにより治療抵抗性を克服することが喫緊の課題である。今回、手術検体から腫瘍浸潤リンパ球の培養と腫瘍細胞のオルガノイド作製により、頭頸部癌の腫瘍免疫状態を解析することを試みた。オルガノイドの作製が完了後に、免疫状態の解析を行う予定である。

3、『小児急性骨髄性白血病治療における薬剤感受性に関与する一塩基多型の同定』

千葉大学大学院医学研究院 免疫細胞医学 青木 孝浩

これまでに本邦多施設共同臨床研究に登録し治療を行なった小児急性骨髄性白血病(AML) 患者 131 例において、予後や細胞内シタラビン代謝産物との相関があると報告のある 10 個の薬剤代謝動態関連酵素の一塩基多型(SNP)を解析し、予後との相関を解析した。そして 10 個のうち 2 つの SNP では本邦の小児 AML 患者においても統計学的有意差をもって予後との相関を認めることを明らかにした。

4、『がん腫に応じたがん関連血栓塞栓症の実態把握、特に膵癌・肺癌患者におけるがん関連静脈血栓塞栓症とがん関連脳梗塞の合併例についての研究』

千葉県がんセンター 脳神経外科 長谷川 祐三

膵がん静脈血栓塞栓症（VTE）患者の脳梗塞（CI）合併の特徴とリスクを検討した。VTE から CI までは中央値 111 日で膵癌・肺癌が 77.4%を占め、合併後生存期間中央値は 1.7 か月と短かった。CI 合併リスクは D ダイマー高値・膵癌/肺癌患者であった。膵癌では原病の悪化で亡くなる事が多い一方、初発 EGFR 陽性肺癌や卵巣癌ではがん/梗塞治療の併用で長期生存例も経験した。がん治療の奏功が望める症例ではがん/梗塞治療の双方を積極的に検討する必要がある。

5、『癌免疫療法における脂肪肝の重要性の検討』

千葉大学医学部先端応用外科 早野 康一

【目的】CT による脂肪肝の定量化が胃癌免疫療法のバイオマーカーとなるか検討した。

【方法】免疫チェックポイント阻害薬療法を受けた症例を解析。脂肪肝を liver to spleen CT attenuation ratio (LSR) で定量化。LSR をサルコペニアや全身性炎症反応と比較し、また予後とも比較。

【結果】LSR はサルコペニア症例や全身性炎症反応の高い症例で低かった。低 LSR 症例は ICI 療法後の OS が不良だった。

【まとめ】脂肪肝は胃癌免疫療法での有力なバイオマーカーとなりうる。